

視覚障害がある教員による語学授業実践例（1）

－ 2021 年から 2022 年

山下 広司

An Intermediate Report on How a Blind Language Teacher Conducted classes without an Assistant

YAMASHITA Hiroshi

Abstract

This article is a report on how a visually handicapped language teacher at a university level has persued his classes after turning completely blind in an accident in 2019. The teacher, who is the author of this article, was born with poor eyesight, but did not have any problem reading and writing until he lost his eyesight in the accident. He started undergoing walking training in February 2020 and resumed teaching in September 2021. The experience during his training surely has a major effect on the styles he takes in teaching. In particular, the idea of sticking to the methods and materials he used to use while he could see comes from the experience during the walking training.

What is worth noting here is that the author has conducted his classes without an assistant. In Japan, there are several blind teachers, but as far as it has been reported, all of them use an assistant. If classes can be taught without an assistant, this will be a major step forward, because there are many educational institutions that are reluctant to hire visually handicapped teachers for cost reasons.

This paper is organized as follows. In Chapter 1, the author introduces what it means to be blind and what type of visual problems he is suffering from. In Chapter 2, the author introduces lessons he got while undergoing his walking training. It will be clear that these lessons have affected greatly on the selection of methods he adopts in class planning. In Chapter 3, the actual methods he has adopted in teaching will be shown.

key words: blind language teacher, conduct class, without assistant

はじめに

本稿は、2019年3月に事故により失明した私が、どのように授業を行ったかを記録に残したものであり、後世の同様の教員に参考にさせていただけたら幸いである。過去にも全盲の教員は多数おり、特に小学校から高校まででは、多くの教員が活躍されている。大学においても、同じ英語担当でも、過去にも桜美林大学などで活躍された先生がおられる。ただ、今回まれな事例であるのは、助手なしで最初から授業を開始したということである。小学校や中学校などでは、副担任などが助手役を

務めている場合が多く、大学では数は少ないものの、奥さんがその役を務めた事例が目につく。副担任や奥さんとはいえ、雇用するには経費がかかることであり、これが必要なければ、より多くの障害がある者の雇用につながると考え、今回筆を執った次第である。

第1章では、そもそも見えないとはどういうことなのか、そしてどういう先生がこの論文を参考にできるのかを定義する。見えないとは、アイマスクをかけた状態ではなく、それよりはるかに過酷なことであること、いつ見えなくなったか、そ

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Glocal Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

の後居所移動があったかどうかなどにより、対応は大きく異なることを論じていく。

第2章では、復職の前提である歩行訓練の内容と、そこから学んだ授業運営にも役立つであろう事項を紹介する。

第3章では、授業を行う上で私が採用した手法を、参考までに紹介させていただく。重要なことは、見えなくなる前と同じものや手法を使える場合は、できるだけ同じものや手法を使うということである。例えば、使用する教材などで、失明前に使用していたものと同じものを使える場合は、それを最大限使用するということである。同じ形で授業をすることがどうしてもできない部分は、その部分は無理をせず、頭を使って別の方法を見つけ、それで代用する。すべてを失明前と同じようにやることなど、そもそも無理な話であり、それを追求するのは単に時間と労力の無駄である。同じかそれ以上の効果が出れば、それでよいのである。このことに気付くかどうか、最初の分岐点になると考える。

(キーワード：全盲視覚障害、授業実践例、音声、助手なし)

第1章 目が見えなくなることと本論文における状況設定

一言に目が見えないというと、アイマスクをした状態と想像され、視覚障がい者の歩行訓練士の訓練などでもアイマスクがよく使用されるが、それは間違いであると考え。しばしば全盲と言われる方から聞くのは、目の中が光った状態であるということである。例えば、「背景が青でCDのようなものが飛んでいるような感じ」とか、単に「白い背景が常に映っており、暗い部屋であっても白く光って見える」などさまざまである。また、左右の目で見えかたや見えるものが異なる場合も多いようである。眼科医に聞いてみても、その原因の明確な説明はできないそうである。私も、同じように光を感じている。ほぼ正確に3日周期で、明るく、なんとなく手が動いたりお皿が見えたりする日、蛍光灯のような強い光が見える日、真っ暗で下の方が少し明るい日が交互に出現する。左

右の目でこの周期がずれており、左右が同じ見え方の日は少ない。就寝時暗い部屋でも光を感じる。ただ言えることは、光が見えても、それが何の役にも立たないということである。

もう一つ指摘しておかなければならないことは、いつ失明したかにより、対応が大きく異なるということである。例えば、今住んでいる家に引っ越してから失明したならば、どこに何があるかが大体わかるであろう。壁の色もわかるであろうから、今自分がどのような環境にいて、ある場所に行くにはどうすればよいか瞬時にわかるだろう。また、どこに鍵や水道の蛇口があるかもわかるので、鍵をかけたり手を洗ったりするのも容易であろう。家の中の訓練は、あまり必要ないかもしれない。

一方、目が見えなくなってから引っ越した場合、今自分がどんな環境にいるのかも、蛇口がどこにあるのかも、訓練を受けてようやくわかるようになるであろう。

このように、見えなくなった時期やそれ以前の経験によって対応が大きく異なることから、まず私の簡単な略歴を示しておくことが重要であろうと考える。

1. 1. 略歴

- ・1968年生まれ。先天性角膜混濁のため、強度の弱視で、左右両眼とも視力は0.03程度。文字の認識などに関わる近くを見る力は、(眉毛が紙につく程度に近づければ)おおむね新聞の文字の識別が可能である程度。

- ・1973年、父親の仕事の関係で米国シカゴ市に転居。視覚に障害がある生徒や移民のサポートを行う特別教室がある現地の普通学校で学ぶ。主に、英語の指導をこの特別教室で受ける。授業は普通の生徒と受ける。土曜日は、日本人学校に通学。

- ・1977年3月26日帰国。米国の学校では個人情報である健康に関する情報を書類に記載しないことになっていたため、健康に関する情報を含まない資料が教育委員会に提出され、提出時期が年度初めであったという偶然もあり、そのまま普通

学校に編入。小学校3年(千葉市立あやめ台小学校)に編入された。これ以降、すべての課程を、普通学校で過ごす。

- ・1981年中学進学(千葉市立草野中学校)。

- ・1983年、左眼を網膜剥離で失明。6月から8月まで療養。

- ・1984年高等学校進学、1988年大学進学、1992年大学院進学。高校入試、及び在学中に受験した実用英語技能検定(日本英語検定協会主催)、国際連合公用語英語検定(日本国際連合協会主催)、通訳技能検定(旧日本通訳協会主催)は、通常の受験生と同じ条件で受験。試験時間延長や別室受験、拡大文字使用や解答用紙の変更などもなし。大学入試では、一部の大学で別室受験となったものの、それ以外の配慮はなかった。大学院は、通常の受験。

- ・1998年明治学院大学兼任講師就任。

- ・2000年、山梨県立女子短期大学(現山梨県立大学)専任教員になる。同時に、横浜国立大学非常勤講師になる。

- ・2009年、右眼角膜移植手術を受ける。それ以前の1年以上、視力低下により文字すら見えにくい中で授業を行う。手術後は、従来通りの視力に戻る。視覚神経は思春期までに形成されているため、成人の角膜移植の場合、手術前より視力が好転することは原則ない。角膜の濁りが取れた分、視野が明るくなることはあっても、視力の改善は手術前に戻る程度である。

- ・2013年、白内障がひどくなったため、白内障の手術を受ける。その際、角膜の再移植も同時に行う。手術以前の2年以上、視力低下により文字すら見えにくい中で授業を行う。

- ・2019年3月、負傷により右眼失明。同時に休職。2018年4月号から連載記事を担当していた『ゼロからスタート English』(Jリサーチ出版)については、次の方法で2021年1月最終号まで継続。

①原稿作成：2019年7月号までは、負傷前に入稿済み。10月号と2020年1月号、4月号、7月号については、自前で入力支援を受ける。口頭で言ったことを入力してもらう形。10月号(6月

末日入稿)以降は、音声パソコンを使用して自力で原稿作成、入稿を行う。音声パソコンは、同年5月に購入。

②校正：2019年7月号と10月号については、支援を受ける。それ以降については、よむべスマイルを使用して、送られてきたPDFを読み上げて、修正すべき箇所を編集部に伝える形で自力で行う。最初は修正箇所を音声で伝えていたが、音声パソコン購入後はメールで伝える形に変更。注意が必要なことは、PDF化された校正原稿を読み上げ装置で読み上げる場合、句読点の有無や大文字、小文字の区別、太文字になっているかどうか、色の区別などまでは教えてくれないということである。このようなことは、原稿作成時に十分注意しておくと同時に、編集者にも注意喚起しておくことが重要であろう。また、外国語を扱う書籍や記事等では、その外国語を母国語とする人に、原稿をチェックしてもらうのが慣例である。このチェックは、原稿入稿前に行う著者も多いが、私は校正段階でお願いした。最後に近くなればなる程、入稿時のみならず、校正時に発生したくなるミスもチェックしてもらえらるからである。当然、句読点や大文字、小文字などの問題もチェック対象である。

1. 2. 点字の位置づけ

高校生までの受験を控えている人なら、全盲になった以上、点字を習得することは必要であろう。試験は墨字か点字が原則であるためだ。今後CBTが導入されて、パソコンの読み上げソフトの使用も許可される時代が来たとしても、例えば英語のReadingを読み上げソフトでやろうとしたら、Listeningになってしまう。相当の英語力がない限り、難しいであろう。CBTの時代になっても、画面の文字を読むことが原則で、読めなければ点字を身につけるしかないであろう。

しかしながら、試験を受ける必要がない成人の中途失明者の場合、点字が必要とは考えにくい。以下で紹介する読み上げ装置やソフトで十分代用できると判断した。

以上からわかるように、私は強度の弱視はある

ものの、辞を読んだり書いたりできる視覚障害者が、50歳で中途失明した者である。点字の心得はない。

第2章 歩行訓練から学んだこと

復職の前提は、職場に安全かつ安定的に到達できるようになることである。このための最短の方法は、今までの生活を最大限維持することであろう。特に、中途失明者の場合は、今まで見てきた情報を最大限活用することが重要であろう。今まで住んできた家に住み、今まで通りの経路で通勤するのが、最短で復職する条件となるであろう。職場の近くに引っ越す人も多いと聞くが、すべてをやり直す覚悟でなければ、大きな代償を払うことになるであろう。家の中の配置から、買い物まですべてが新しいものになるだけではなく、今まで見た経験もない中ですべてをやり直すことになるからだ。

私の場合も、15年住んできた八王子から、今まで通りの経路で通勤することとした。ただ、京王線めじろ台駅から京王線で高尾駅に出ていた今までの経路では、高尾駅が改装予定があり、その場合駅構内の訓練をやり直さなければならなくなることが予測されるため、(今まで何度も使用した経験のある)バスでめじろ台駅から西八王子駅に出て、中央線で甲府駅まで行くこととなった。変更箇所は、おおむねこれだけであるが、歩行経路で危険を伴う場所は、今まで何度も通ったことのある別の道を使用する箇所がある。以下が、歩行訓練の概略である。

2. 1. 歩行訓練の概略

- ・2020年2月、歩行訓練開始。家から京王線めじろ台駅までの徒歩での移動から始め、次いでバスでJR西八王子駅まで行けるようになる。駅構内の案内は、転落事故が多いことから、駅職員にお願いすることが強く推奨されているため、この段階で甲府駅まで到達したことと同じである。8月までかかったが、この期間中、コロナ感染症の流行により、訓練中止期間が相当あった。

- ・2020年8月、甲府駅からの訓練開始。まず

は、バスで大学最寄りの飯田3丁目バス停まで行けるようになり、そこから徒歩で通勤する練習が行われた。バスの訓練は2回で済み、バス停から大学までの訓練を行う予定であったが、一部区間で大規模な工事が行われていたため、工事区間を除く部分の訓練を行った後、甲府駅から大学まですべてを今まで通り歩く訓練を優先し、工事終了後に工事区間の訓練を仕上げることとなった。工事区間は短く、その工事も2021年2月に終了予定だったため、4月には十分間に合うとの計算であった。特に、工事が、どぶ板を敷設する工事であったため、バス停から大学まではすべてどぶ板の上を歩けばよいことになった。これは幸運であった。どぶ板の上は、電柱などはないため、点字ブロック上同様、安定して歩けるのである。3月にバスでの通勤経路は、工事区間も含めすべて訓練が終了し、9月には徒歩での訓練も終わった。都内の買い物や、甲府市内での緊急時等の補足訓練(トイレや高速バス乗り場などにおける練習)も行われた。

2. 2. 歩行訓練から得た教訓

歩行訓練から得た教訓の中で、授業設計に役立つようなことは多くあるが、最も重要なことは、見える時にやっていたことを最大限変えないということである。どうしても変えざるを得ないことは、項目を整理して、頭を使って解決するということも学んだ。例えば、歩いていて、今まで見えていた信号が、今では見えないのである。その場合、信号の前に立ち、何とか解決策を探すのである。自分と平行に走る車が動いていれば、自分が渡ろうとしている信号も青であろうし、平行に走る車が止まっていて、自分の前を車が走っていれば、赤であろう。また、このような見分けがつくほど車が多くない時間帯なら、その信号を避けるために側道にわざわざ入り、少し離れたところを渡り、また元の方向に戻るという方法もあろう。信号無視とは、赤なのに白い白線内を渡ることであり、少し離れたところを渡れば通常の横断行為である。白杖を前に出し、渡る意思を示した上で渡るのがルールである。

点字板のない道をまっすぐ安全に歩くためにどぶ板の上を歩くことも、見える時は想像すらしたこともない行為である。しかし、どぶ板は動かそうと思えば動かせるようにしておかなければならないものであるということを考えれば、その上に重い電柱などのポール類は置かないであろう。しかも、どぶ板と道路は材質が違うため、その境界は白杖で容易に探れる。さらに良いことに、どぶ板は通常、道の端にある。どぶ板の上を歩けば、比較的安心して、しかもまっすぐ道を進めるのである。今あるものを有効活用しながら、頭を使って一つ一つ解決していくしか方法はないのである。

第3章 授業

授業も、基本的にはうえで紹介したように、今までと同じものから始めることである。使用したことのあるテキストか、自分が書いたテキストを使用すれば、見なくても教えられるはずである。こういうものから始め、慣れてきたら新しいものに挑戦するのがよいであろう。しかしながら、見えなくなるとどうしてもできなくなるものも存在する。その場合は、歩行における信号の識別の場合のように、頭を使用して代替策を考えるしかない。各授業の詳細は後述するとして、全授業に共通する項目から始めることとする。

3. 1. 出席確認

見えていた時は難なく名簿に記載された学籍番号を呼び、返事があった者を出席として記録できた。失明した今では、これは不可能である。

多くの大学では、学生証を教室にある読み取り機に挿入すれば、自動的に出席確認ができるようになっているそうである。これがあれば、出席確認は何の問題もないであろう。

このような装置がなくても、学生証にバーコードがついていれば、それを読み取ればよい。バーコードリーダーは5千円程度で購入可能であり、パソコンにつなぎWordかExcelを開けば記録可能である。山梨県立大学では、ICしかついていないので、問題となる。ICリーダーを購入できれば良いのだが、高価であるため、個人研究費で

は不可能である。

そこで、学生自ら何か他人には貸しそうにないバーコード付きのものを持参させ、初回の授業でそのバーコードをバーコードリーダーを用いて読み取ったうえで、その横に氏名を入力させる作業を行った。2回目以降は、バーコードだけを入室時に読み取れば、後でだれが出席していたか容易に確認できる。注意が必要なのは、学生がその授業で使用するノートなどについているバーコードを使用する場合である。ノートなどは、同じものを使用する他学生もいる可能性があり、2人以上が同じバーコードを使用してしまうことにもなりかねない。同じバーコードを使用する学生がいなかを、初回終了時に確認することが大切である。

他学生のバーコードを持参し、代返をする可能性もあり得るが、その危険性は出席カードを使用する場合より低いと考える。

オーカムという、メガネのフレームの横にカメラを付けた読み上げ装置でも、出席をとることは可能である。この装置には、通常の文字読み上げ機能に加え、バーコードを認識して商品名を教えてくれる機能、顔認識機能で登録された人物が近くと名前を教えてくれる機能などがある。この顔認識機能を使用して、出席をとることも可能である。ただ、私はこの手法は採用しなかった。誰が教室にいるかは確認できるが、その情報を何らかの方法で記録しなくてはならない。その手間を考えると、上記方法の方が便利と判断したからである。

3. 2. 板書

板書は、授業を行う上で必ずしも必要ではない。音声パソコンを使用し、レジメを作成して配布する方法もある。ただ、これには膨大な時間がかかるため、板書は是非行いたいことである。

中途失明のように、文字を書いていた経験さえあれば、板書は難しくない。重要なことは、本人が見えないので、説明をしながら追加記入ができないということである。一気に書いてしまってから、説明するのがよいと考える。

どうしても説明の途中で何か付け足す必要がある場合は、それを書く場所にマグネットでも(書

いている最中に)置いておき、そこに付け足すという方法もある。

例 ● is difficult to learn a foreign language.

● (マグネット)を手で探してはがし、そこにItを入れる。

It is difficult to learn a foreign language.

また、見えない状態で板書すると、どうしても文字が重なってしまうことがよくある。これを防ぐ方法としては、T定規の裏に磁石を付けたものを(黒板に貼り付けて)使用して書けば、まっすぐ、しかもどこまで書いたか容易にわかる。書いた部分のすぐ下にマグネットバーを置くだけでも、字をどこまで書いたかわかり、重なることを防げる。説明が終わったら、すぐ消してしまう習慣をつけておくことも大切である。

チョークの色の区別は、セロテープなどで印をつけると便利である。教室にあるチョークは使わず、教務室などで手渡して色ごとに受け取り、自分で決めた印をつけて、教室に持っていくのがよいでしょう。

ホワイトボードは使用しない方がよい。マジックのインクが出ていなくてもわからないからである。どうしても使用しなくてはいけない場合は、新品のマジックを使用し、早めに交換することが肝心である。チョークの場合、黒板に触れていれば必ず書けているであろうから安心であろう。

◇学生が書いた板書を添削する場合

残念ながら、これは難しい。学生に自ら書いたものを読み上げさせる方法はあるが、修正すべき個所に正確に書き込むことはできない。学生がその場で書いた英作文を添削する姿を見せることにより、教職学生に、その場で辞書も調べずに添削することの大変さと、それができるようになるためにはどれだけの知識を身に付けていなければならないかを教える絶好のチャンスだけに、残念であるが。

私は、事前に課題を提示し、メールで解答を送らせ、それをプリントにまとめて配布し、解説を行うことにより代用した。この方法でも、板書させる失明以前の方法と、英語能力増進という観点では、同等の効果が期待できるであろう。その場

で課題を提示して、その場でやらせることを重視する、つまり試験などを想定して時間を重視したいなら、その場でパソコンに送らせ、こちらで板書して解説する方法もあろう。

3. 3. テキストなどの資料の読み上げ

英文法などでは、数的には多くない例文さえ頭に入れていれば、文法説明には困らないであろう。ただ、英作文のように多くの情報が必要な科目では、すべてを頭に入れておくことはできない。私はこの1年では担当していない講読などでは、なおさら多くの情報を必要とするであろう。作文の解説では、私は、学生に事前に作文をメールで送らせ、それをプリント (Word) で配布したため、そのデータがパソコンにあり、それを音声で聞きながら解説できた。

現時点では、それ以上の問題には直面する機会がなかったが、もし何かのテキストや本を使用するという場合について考えてみることにする。テキストをよむべえスマイルなどで読み上げ、それをイヤホンなどで聞きながら授業するという方法がある。ただ、読み上げの正確さには問題があるため、あまりお勧めしない。テキストを目に障害がない人に読んでもらい、それを録音し、イヤホンで聞きながら授業するという方法もあるが、他人の手を煩わすことになるので、あまりお勧めしない。本論の目的は、単独で授業することを目指すことからしても、なるべく避けたい方法である。

コロナ感染症蔓延に伴いオンライン授業が全国的に行われたことを機会に、テキスト会社はデジタル情報を提供してくれるようになった。上で述べたように、出席をとるため教室にパソコンを持ち込んでいるので、そのPDFをそのパソコンで聞きながら授業することができる。ただ、PDFをパソコンで聞くには、PC-Talkerとは別に、My Bookというソフトが必要となる。よむべえスマイルでは、PDFを相当きれいな音声で聞くことができるので、私はこちらの方をお勧めしたい。また、後者では、かなり細かく切ることができるので、語学など文の中の一部を聞き直したいことが多い科目などには、最適な方法であろう。

3. 4. 試験

試験も、文字で書いたものを採点するのは無理なため、パソコンでデータとしてメールしてもらうのがよいであろう。その場合、メール本文にそのまま書いてもらう方法がよい。My Mail 5というソフトがあれば、メールを開くだけで、最後まで自動的に読んでくれる。「転送」を選択し、上に採点結果をメモし、「下書き保存」しておけば採点終了である。文字で書いたものを採点していた時期よりも、はるかに早く作業が終わった。

ただ、パソコンで解答を送らせる場合、インターネットで調べたり、翻訳機を使用して解答したりできることを意味する。インターネットで調べても出ていないような問題を作る必要がある。また、他の学生同士で相談しても容易に答えられないような、応用力を試す問題にする必要もある。以下「英文法」の紹介とあわせて、実際に使用した問題を示す。

3. 5. 授業実践例

以下で、この1年に担当した授業とその実践例を紹介する。

3. 5. 1. 英文法1(2021年度後期)

この科目は、健常者である英語母国語話者のPeter Mountford氏との共同担当科目である。使用したテキストである*Real Grammar for Creative Communication*, (南雲堂、2017年)は、2人の共著であり、内容や例文については、何度も校正をやっているため、大体頭に入っている。山下は、文法説明を担当した。授業前にテキストのPDFをよむべえスマイルで聴くだけで、何を説明するかは把握できた。このテキストには、付属品として教授用資料(紙ベース)、テキスト掲載の練習問題のうち一部の練習問題を英語母国語話者が読み上げたCDと併せて、テキスト前文と教授用資料をPDF化したCDが、標準で採用教員に配布されている。教授用資料には追加の練習問題も掲載されており、これを採用教員が印刷して配布するための便宜を図る措置であり、私が失明

することを予期してつけたものではない。このテキスト全文等のPDFが役に立った形である。

Mountford氏は練習問題を担当。おおむね山下60分、Mountford氏30分が目安であった。

文法説明は口頭と板書で行われ、練習問題は口頭で行われ、解答例をMountford氏が板書した。教授用資料に掲載の追加練習問題も、プリントで配布し使用された。出席は、Mountford氏が口頭でとり、名簿に記録したため、バーコードリーダーは使用していない。文法説明にパソコンからの読み上げ等の補助も必要ないため、器具等は一切使用していない。

授業は対面で行われたが、1月に入ってコロナ感染症が蔓延したため、試験はオンラインとなった。

試験問題は、対面授業が前提の12月の時点で作成したものを使用した。山下が採点する文法説明問題の部分は、授業時に問題を配布し、解答を指定期日までにメール本文に貼り付けて送るよう指示した形で作成した。作文問題と間違い修正問題(間違いを探し修正させる問題)は、授業時に紙ベースでやり、Mountford氏が採点することを前提として作成された。例年そうであるように、山下の文法説明問題は、インターネットで調べても簡単には答えが見つからないように作られているので、自宅でやらせることに大きな問題はないと考えた。ちなみに、以前はすべて教室で行っていたが、本や辞書など紙ベースのものなら何でも持ち込み可であった。

作文問題と間違い修正問題については、オンライン授業になってしまったため、他の問題(文法説明問題)と併せて問題をwordで学生に送ったため、間違えの部分に下線が入ってしまい、その意味が半減してしまった。問題をPDFで送れば下線が入ることはなかっただろうが、学生がWordに打ち直してしまえば下線が入ってしまうので、PDFで送ることも不正防止の特効薬とは言えないだろう。作文問題は、和文英訳方式であったが、翻訳ソフトを使用したと思われる解答が多数あった。これら不正が行われた可能性のある問題を削除して、成績判定が行われた。

3. 5. 2. 英文法2 (2022年前期)

この科目は、私一人で担当した。英文法1で使ったテキストの後半部分を扱った。文法説明は、英文法1と同じ方法で行った。練習問題は、和文英訳と間違い探しの部分を、指定学生が事前に解答をメールで私に送り、それをまとめたプリントを作成、配布し、解説を行う形で行った。

試験は、文法説明問題と間違い探し問題から構成。紙で配布し、指定時間内にメール本文に貼り付けて私に送る形をとった。間違い探し問題では、なぜそこが間違っていると思ったかを簡潔に述べさせることにより、Wordに打ち込み、下線により間違い箇所を見つけ、修正しただけでは完全答案にはならないようにした。また、英文法1では、間違いを直して、全文書き直させる形であったが、今回は間違い箇所のみの指摘と修正・説明だけとし、全文書き換えは避けた。Wordに打ち込んだ際、他の間違い箇所に下線が出てしまうのを防ぐためである。間違い探し問題は3文あり、各文とも間違いの数は一つとは限らないとしているため、他の間違い箇所をWordに打ち込んだ際、下線によって見つけてしまうのを防ぐためである(完全な解決策にはならないことは前述の通り)。

3. 5. 3. 英語の構造(統語)(2021年度後期)

使用テキストは、今まで英語学概論で何度も使用した本の同じ部分とした。2021年度及びそれ以前2年間は、英語学概論は担当していないので、重複の可能性はほぼない。このテキストは洋書であり、すでに廃版となっているため、出版社からPDFをいただくことは困難と判断した。また、印刷状態がよくないため、よむべえスマイル等でもうまく読めなかった。つまり、授業前の予習に事欠く状況であった。そこで、大学院時代にやらされていたオーラルレポートという方式を採用することとした。オーラルレポートとは、論文などの教材の内容を、学生が口頭で説明し、その論文等を読んでいない人にもその内容を理解してもらうという訓練である。

この訓練は学生にとってはよい練習になることは言うまでもないが、初めて触れる専門分野の教

科書を英語で読み、その内容を理解し、みんなの前で説明させることは、いささか無理を伴うことは言うまでもない。

そこで、オンラインを使用して、それぞれの回の担当者に対しテキスト本文を和訳させたうえで事前指導を行った。オンライン事前指導の際は、テキストを学生に音読させながら和訳させる十分な時間的余裕があるので、担当学生のみならず私まで内容把握はすべてここで済ませた。授業時は、学生がオーラルレポートで原文に沿い内容説明をしてくれる(内容がなじみのないものなので、どうしても和訳に近い説明になってしまい、他学生にもかえってわかりやすかった)ので、私は原文は見ず、専門知識をもとに説明を行うことに集中できた。特に英文解釈上重要な箇所以外、和訳など本文に関する詳細な説明は行っていない。

この方法により、授業時に細かいところを原文を見ながら説明する負担を、大幅に軽減した。そもそもこのオーラルレポートとは、担当教員が論文を読まなくても済むように作られたいきさつすらある。

試験はオンラインで、自らオーラルレポートをやった箇所をもう一度やってもらった。授業でオーラルレポートをやった後に説明を聞き、どれだけ自分がやった箇所が本当に理解できているのかを試すための試験であった。もちろん、採点するにあたり、見なければいけない解答用紙など存在しない。

3. 5. 4. 英語Writing 3 (2022年度前期)

この科目を担当したのは、今回が初めてである。失明前は、1年生向けの英語Writing 1, 2を担当していた。新しい科目だけに、新たなテキストを採用することも検討したが、安全運転を心がけることにした。

毎回その時間のテーマを示し、それについての80-100語での作文をしてもらった。添削の希望者はメールで私に送り、それを掲載したプリントを作成し、次回の授業で配布した。議論もしながら、その解説を行った。データはパソコンの中にあるので、出席に使用するために教室に持って

行ったパソコンで聞きながら解説を行った。

試験は、英文法1の反省、つまり自宅でやらせると翻訳ソフトを使用する者がいるということ踏まえ、紙に書かせる方式で行った。それを健常者に音読してもらい、採点を行った。今回は英語母国語話者にお願いしたが、英語母国語話者である必要はない。何が書いてあるかを知るのが目的であり、発音のよし、悪しは関係ないからである。

この紙ベースの試験に加え、自宅で自由にできる作文課題の試験も併せて行った。翻訳ソフトも、使いたければ使用できた。段落の構成や説得力、論理思考などを見るための試験であった。翻訳ソフトは計算機のように広く普及してきており、社会に出たら必ず使うものになるであろう。翻訳ソフトの使い方を教えるのも、社会とのインターフェースの役割を担う大学の役割であると考えたので、その使用をあえて排除しなかった。翻訳ソフトでできない、論理的な内容性や接続詞の適否などを判断材料にした。

このように複数の試験が行われた時の成績入力に便利な方法がある。まず、メールで送られてきた、学生が自宅で行った答案は、読んだのち「転送」を押し、上に成績をメモし、「下書きBox」に入れておく。音声で読み上げてもらった答案は、今回は各学生別にファイルで送ってくれたので、「Download」に入れておいた。音声答案を採点して記録するには、まず「下書きBox」から一人ずつ（自宅で行った答案を採点した）答案を呼び出し、次いで「Alt + TAB」を押し「Download」に移動し、その学生の音声の答案を聞き評価し、ふたたび「Alt + TAB」を押し「下書きBox」にあるその学生の答案の上のメモ欄にその評価を書きこむ。すべての採点は、この要領で行う。最後に、成績入力用の名簿を呼び出した後、「Alt + TAB」を押し「下書きBox」に移動し、各答案を呼び出しメモ欄に記載されたメモをもとに成績を決めたら、再び「Alt + TAB」を押して名簿に戻り、成績を入力する。

3. 6. 使用機器及びソフト、便利なもの

機器 よむべえスマイル、オーカム

パソコンソフト PC-Talker、My Mail 5、My Book

便利なもの マグネットやマグネットバー、セロテープ

目が見えなくなると、タッチパネル操作はできなくなる。タッチパネル操作が1回か2回なら、押すべき場所を教わり、そこにセロテープを張っておくと、次回以降そこを探し押せばよい。セロテープは透明なので、目の見える人が画面を確認する際の支障にはならない。

おわりに

これまで紹介してきたように、失明した場合、以前住んでいたところに住み、以前と同じような道順で行動し、さしあたり以前使用していたテキストから始めるとよい。この、古いものを大切にするという考え方は、ここで紹介してきたことに限ったことではない。多くのことに共通しているのである。

例えば、コピー機などを考えてみたい。少し以前なら、画面上で用紙サイズを「自動」と押し（タッチし）、続いて枚数ボタンで枚数を押せば、コピーは独りで十分できたはずである。画面で「自動」をタッチすることは難しいが、「自動」の上にセロテープなど透明なものを張っておけば、容易に探してタッチできるだろう。透明なテープなので、他の人が画面を見る際の支障にはならない。枚数ボタンは、画面上ではなく、押しボタンなので、自ら探し押せる。現在では、すべての作業を、画面上で行うようになってしまった。1, 2か所をタッチすれば済むなら、セロテープでマークしておくという方法で対応できるが、すべてが画面上の作業ということになってしまうと、セロテープでは到底間に合わない。他人の手助けがなければ、コピーすらできないということになってしまう。

便利さを追求することは重要であり、それに異議を唱えているわけではない。銀行のATMや駅の自動券売機にあるような、数字ボタンでも操作できるような補完的機能を併せてつけてほしいということである。あるいは、5台コピー機があるなら、少なくとも1台ぐらひは、少々古い機械も

置いてくれるという優しさも欲しい。新しい複雑な機械に苦慮しているのは、何も視覚障害者だけではない。コンビニでコピー機の使い方が分からなくて困っているお年寄りや、券売機の前で困り果てているお年寄りを、しばしば見かける。

新しい技術によって、障害があってもできることは、大幅に増えた。しかし残念ながら、それによって今までできたことができなくなってしまう事例も多いのが現実である。

※参考 英文法で出題した問題の例

【問題例】次のような記述が誤りであることを、実例を示しながら論述してください。

(記述) 英語の wh 疑問文は、まず Yes/No 疑問文を作り、次いで聞きたい語を wh 句に変えて前に移動する。

【問題例】受け身文において、be 動詞以外にも get などの動詞が使える理由を、論述してください。

【問題例】次の例文 1) を規制する制約が、例文 2) のような日本語では作用しない理由を、簡潔に述べてください。なお、英語の that にあたるものは、日本語では「と」です。

例文 1) X Who do you think that came?

例文 2) あなたは、誰が来たと思いますか?

【問題例】wh 移動があることを証明する際に、次のような文を使用するべきではない理由を、簡潔に述べてください。

I wonder when he arrived here.